「問い」の編集工学

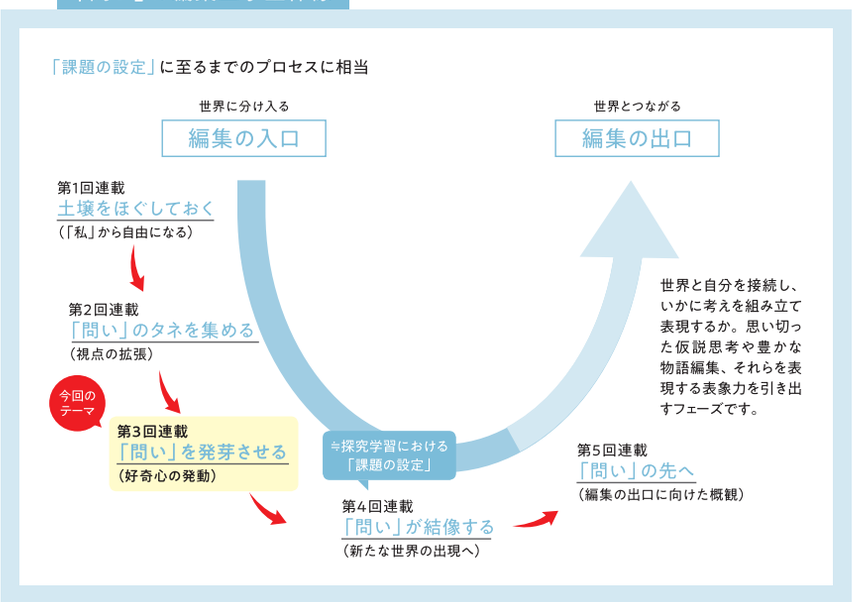
第3回

編集工学研究所　安藤昭子

問いを発芽させる ―好奇心の発動―

探究活動からイノベーションまで、世代や領域にかかわらず今問われる「問う力」。「答え方」ではなく「問い方」を鍛錬するにはどうすればいいのか。前回は、「問い」のタネを集めていく独自の方法について展開いただきました。第3回となる今回は、本を通して「問いの発芽」を促すアプローチについてお話しいただきます。

「問い」の編集工学全体像



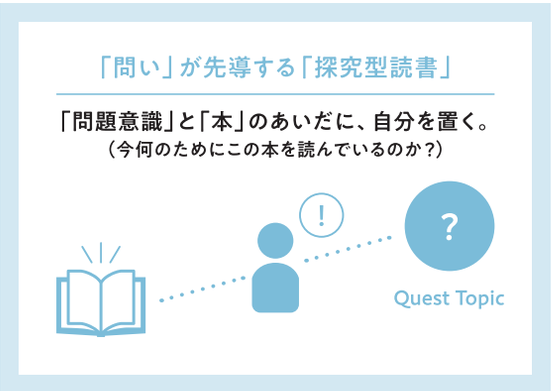
「地と図」の連想から始める

情報の多面性に注目すると、問いのタネが集まってくる――前回は、情報の「地と図」を動かしながら、特定のトピックをさまざまな角度で捉え直す演習をご紹介しました。問いのタネを収集していくための、最初の取っ掛かりは何でも構いません。ニュースになっていること、授業で知ったこと、友達との会話、好きなアーティストの話題など、どんな些細なことでもいいので「ふと気になること」を仮のトピックに据えてみます。授業で設定されているテーマがあれば、それが最初のトピックになってもいいでしょう。

特定のトピックの「地と図」を動かしながら連想を広げていく段階では、なぜ自分はそれが気になるのか、何にひっかかるのか、そのことにも注意を向けてみましょう。「それはつまり…とも言える」という具合に言い換えをしてみると、自分の中にある別の見え方に気がつきます。そうして情報を動かしていくなかで湧き上がる疑問や違和感を、落書きするように書き出していきます。これが最初の「問いの束」になります。この状態でも既に、好奇心はむずむずと動き出すはずですが、自分のイマジネーションの外にある「知」と半ば想定外の出会いをすることで、スタンバイ状態にある好奇心を一気に芽吹かせます。今回は、「問いの発芽」を強力にサポートする読書法をご紹介します。

「問い」が先導する「探究型読書」

まずは本を選びます。「自分の関心」と「偶然の出会い」がいい塩梅に混じり合うことが大事なので、あまり慎重に吟味はしません。制限時間を決めて、「問いの束」に自由に思いをめぐらせながら、本棚を歩きまわってみてください。ピンときた本を手に取りながら、表紙や目次を眺めて興味が湧いた本を手元に残します。



探究型読書の3ステップ

何らかのテーマを考えるために本を活用する読書法を、編集工学研究所では「探究型読書（Quest Reading）」と呼んでいます。探究型読書では、本の内容をあまさず理解することよりも、本を手

がかりにして思考を進めることを目指します。自分の問題意識や仮説をフィルターにして本から情報をすくい上げ、それによってまた自分の仮説を進めていく。探究型読書においては、徹頭徹尾、主体は読者の側にあるというスタンスをとります。「問いが先導する読書」と言っていいでしょう。この先導する問いを「Quest Topic」と呼んでいます。

読書は、本文を読んでいる最中の行為だけを指すものではありません。本に出会って内容を想像するところから始まって、読み終わった後にさまざまに考えを巡らす過程まで含めて、読前、読中、読後のすべてのプロセスが読書であると考えます。

物は試し、探究型読書を実際にやってみましょう。「Quest Readingノート」(次ページのQRコード)をダウンロードして両面印刷をすると、一冊分の探究型読書のノートとして活用いただけます。

安藤昭子

あんどう・あきこ● 編集工学研究所・代表取締役社長。出版社で書籍編集や事業開発に従事した後、2010年に編集工学研究所に入社。企業の人材開発や理念・ヴィジョン設計、教育プログラム開発や大学図書館改編など、多領域にわたる課題解決や価値創造の方法を「編集工学」を用いて開発・支援している。2020年には「編集工学」に基づく読書メソッド「探究型読書」を開発し、企業や学校に展開中。著書に、『才能をひらく編集工学』(ディスカヴァー・トゥエンティワン)、『探究型読書』(クロスメディア・パブリッシング)など。

STEP1 「読前」: 目次読み

探究型読書では「読前」がとても重要。本文を読み始める前に、本に対して自分なりの想像力を働かせておきます。この読前のひと手間をかけることで、読者は受動的な読み手から主体的な本との対話相手へと変身することができます。

読前では、まだ本文に入らずに表紙と目次だけに目を通します。その際も単に文字を読むのではなく、「伏せて開ける」効果を使いながら本の輪郭をつかみます。情報は「伏せる(隠す)」ことで「開いた」ときの印象が鮮明になります。私たちはインプットされた情報によってのみ事象を認識しているのではなく、その情報の「不足(ない状況)」によって自分の想像力を刺激し意味をつくり出しています。「伏せて開ける」ことによって、想像力が存分に動き出し、読書体験を一気に深めることができるのです。

① 表紙まわりを眺める

表紙、裏表紙、ソデ、オビなど。「この本はどんな本だろう?」と想像力を働かせながら表紙の情報を吟味します。

② 目を閉じて、表紙の情報を思い出す(伏せる)

タイトル、著者名、オビの文言など、表紙を見ずに思い浮かべてみましょう。さっき見たはずの情報なのに、あちこち思い出せない空白だらけになることでしょう。それで結構です。

③ 目を開けて表紙を確認する(開ける)

今思い出せなかった空白に、情報が流れ込んできます。「伏せて開ける」ことによって、情報がより印象深く刻まれ、想像力をかきたてます。

同様の手順で、目次も読みます。目次の1ページ目に1分ほど目を通したら、10秒ほど目を閉じて書かれていたことを思い出し、目を開けて確認します。これを、目次を読み切るまで繰り返します。目次の大きな構造をとらえるつもりで頭に入れるようにするとよいでしょう。目次は本の設計図であり、読書のための地図になります。

表紙まわりや目次から、キーワードとホットワード(第1回参照)を抜き出して、落書きするようにメモしていきます。それを組み合わせたり、並べ替えたりすると、本の輪郭がだんだんとはっきりしてきます。

もう一歩進めて、この一冊を読み終わったあと自分は何を思っているか、という読後の自分を想像してみてください。

「読前」の仕上げとして、3~4人でグループになって、Quest Topicと選んだ本の共有をすることをおすすめします。どんな問いの束があったか、なぜその本を選んだのか、どんなことが書いてありそうか。「あたかも読んだかのように」仲間に教えてあげてください。脳は振る舞いに騙されるので、「読んだつもり」で話をするとそれを追いかけるように想像力がフル回転します。

STEP2 「読中」: QAサイクルを回す

いよいよ本文に入っていきますが、探究型読書では頭から一字一句を読む方法はとりません。読前に立てた仮説や自分の問題意識を頭に置きながら、ザクザクとページをめくっていきます。著者はたいてい、文中に小さな「問い」とその「答え」を組み込みながら本文を構成しています。著者の問題意識とそれにまつわる発見といってもいいでしょう。こうした著者

本連載のバックナンバーはこちらからご覧いただけます

続きます

の「問い＝Q」と「答え＝A」を追いかけるつもりで、どんどん本文をめくっていきます。まんべんなく理解しようとするのではなく、あたりをつけて、本の趣旨やメッセージ、キーポイントを素早く読み取っていく読み方です。

このときに、自分の「問い＝Q」と「答え＝A」も同時に立ち上がるように意識します。本文を読みながら浮かんできた疑問（Q）や、新たな考えとして発見できたこと（A）など、自分の頭で起こるさまざまな変化にも意図的に注意を向けます。本文を読み進めていると、つい著者の言い分を汲み取るほうに思考が引っぱられますが、探究型読書においてはあくまで主体は読者です。読み手の想像力のほうに軸足を置き、著者の「Q」と「A」を活用しながら、自分の「Q」と「A」も豊かに引き出していくことを目指します。

この要領で、新書一冊であれば20～30分で目を通します。もちろん、すべてを読み切れるわけではありません。どんどんページをめくりながら気になるところは少し手を止めて前後にしっかり目を通すなど、緩急をつけながら読み進めます。目次を手がかりに、気になるところから拾い読みする形でも構いません。

STEP 3 「読後」：アナロジカル・シンキング

本文を読み終えたら、一冊の本から得た情報が「何に似ているか、何と関係ありそうか」というアナロジー（類推力）を働かせて、自分や周囲の事象との関係線を発見していきます。こうした読後のアナロジカル・シンキングによって、読書体験は深く印象に刻まれ、一冊との出会いが格段に豊かなものになります。

最後に、「Quest Topic」に照らして思うこと、仮説や疑問や問題意識をメモしましょう。改めて考えたいこと、本との対話によって引き出された問いを、次の「Quest Topic」としてメモしておきます。

これで探究型読書はひととおり終了です。再度グループで、考えたことを交わし合いましょう。一人ずつの発表という形にせずに、次の問いが生まれてくるような対話を心掛けます。お互いに違う本を読んでいても、あるいは違ったQuest Topicを掲げていたとしても、「問いが先導する読書」体験を終えた直後では、どんな情報も自分の想像力を触発してくれるはずです。「～さんの話にもあったように」「それを聞いて思ったんだけど」など、人の発言を何かしらの形で引き取るようにすると、不思議なくらい対話はつながっていきます。

問いから問いへ

探究型読書と対話の時間を通して最も心をつかまれた問いを残しておきます。その問いをもちながら再度本棚に行くと、また気になる本がどんどん目に飛び込んでくることでしょう。こうして、問いから問いへの連鎖を起こしていくなかで、真に探究したい独自のテーマの骨格がやがて浮かび上がってくるはずです。

探究型読書のためのノート
「Quest Readingノート」は
こちらからダウンロードできます。

探究と読書の関係を考える3冊

多読、深読、斜読、熟読…本はどんな読み方をしてもいい。探究を広く深く速くする、読書という営みの不思議に迫る。

『多読術』
松岡正剛（ちくまプリマー新書）

前人未到のブックナビゲーションサイト「千夜千冊」で知られる編集工学者・松岡正剛の「本との付き合い方」を大公開。お気に入りのジーンズを穿くように本と接する、アスリートがたくさんの筋肉を動かすように読み筋を鍛える、読書は三割五分の打率で上々、三分間目次読書で読みが速くなる…。本編で紹介する「探究型読書」のベースにもなった、セイゴオ流読書術の極意を伝授する。

『本を読むときに何が起きているのか』
ピーター・メンデルサンド（フィルムアート社）

原題は"What We See When We Read"。本を読んでいるとき、私たちの脳や心や体には何が起きているのか？ 本と読者の間にゆらめく豊かなイメージの世界を、数々の名ブックデザインを手掛けた視覚の魔術師が美しくも奇想天外なビジュアル構成で描き出していく。文学や記号論や図像学を縦横無尽に往来し、読書と想像力の謎を探究する、めくるめくブックアトラクション。

『読書について』
アルトゥール・ショーペンハウアー（光文社古典新訳文庫）

「悪書は知性を毒す」「反芻し考えたときだけ本は血肉になる」「読破すべきは世界という書物である」――産業革命後に押し寄せた大衆文化の激流のなかで、一人の哲学者が時代に活を入れるように綴ったこの小さな一冊は、当時出版されるやベストセラーになった。2世紀を経た今も色褪せない、人間の本質を求め続けたショーペンハウアーによる「自分の頭で考える」ための読書哲学。